研究開発状況報告

1　研究開発名

TAMBA Mirai Project　丹波からＴＡＭＢＡへ

～グローバルな視点で丹波の地域課題解決に主体的に取り組むグローカルリーダーの育成～

2　研究開発概要

地域が抱える課題と世界が抱える課題との共通点を見いだし、SDGｓ（持続可能な開発目標）に関連するテーマについて、地域の自治体や関係機関に加え、海外の教育機関も含めたコンソーシアムを構築し、グローバルな視点で共同研究を行うことで、地域と世界をつなぐ柔軟な発想を持ち、立場や文化、背景の異なる人々とも協働しながら実践的に学び、地域資源を生かした課題解決について提案し、地域や世界の未来を創造できるグローバルな人材の育成をめざす。

育成すべき具体的な資質・能力として、①地域の魅力と課題を理解し、活性化や課題解決に積極的に関わろうとする姿勢、②世界と地域を結び付けた広い視野から地域課題を解決しようとする柔軟な発想力、③価値観や文化の異なる人たちと協働しながら課題解決に取り組む実践力等を培うことで、将来グローバルな視点で地域を創造することのできるリーダーを育成できると考える。

3　運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
中瀬　勲	兵庫県立人と自然の博物館　館長	学識経験者
高畑　由起夫	関西学院大学　フェロー	学校教育に専門的知識を有する者
杉岡　秀紀	福知山公立大学　准教授	学校教育に専門的知識を有する者
柳川　拓三	丹波市観光協会　会長	関係機関の責任者
Rooks Matthew John	神戸大学　准教授	学校教育に専門的知識を有する者
荻野　雅文	丹波市ふるさと創造部 ふるさと定住促進課定住促進係長	関係行政機関の職員
蘆田　典幸	兵庫県教育委員会事務局高校教育課指導主事	関係行政機関の職員

4　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
丹波市	市　長　林　　時彦
丹波市教育委員会	教育長　片山　則昭
丹波市国際交流協会	会　長　山口　直樹
丹波市商工会議所	会　頭　大地　但
丹波市観光協会	会　長　柳川　拓三
県立丹波医療センター	院　長　西崎　朗
福知山公立大学北近畿地域連携機構	市民学習部長　杉岡　秀紀
ワシントン州　ケント市	市　長　ダーナ・ラルフ

ワシントン州　オーバン市	市　長　ナンシー・バッカス
兵庫県教育委員会事務局	高校教育課長　西田　利也

5　カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	藤江　康彦	東京大学大学院教授	都度依頼し謝礼支払い
海外交流アドバイザー	松岡 秀司	カンボジア パンニャサストラ大学教授	都度依頼し謝礼支払い
地域協働学習支援員	鴻谷 佳彦	NPO法人Imagine丹波理事長	都度依頼し謝礼支払い

6　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ALT２名配置	○	○				○	○	○	○	○	○	○
運営指導委員会指導・助言					○					○		

（2）実績の説明

管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

・英語教育、国際理解教育を推進するために、ALTを２名配置した。

・運営指導委員会に担当指導主事を派遣し、大学・企業・関係機関等の専門家と意見交換を図りながら、事業の成果と評価をもとに指導・助言を行った。

7　研究開発の実績

（1）実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
地域課題に関する課題研究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
地域課題から世界を考える日				中間発表		中間発表			学年発表	○		
テレビ会議等による海外校との協働学習	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
グローカルサミット						○	○	○	○			

ローカルキャリア教員養成セミナー				○	○						○	○
地域医療系人材養成プログラムの開発	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
地域公務員養成プログラムの開発	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
「ようこそ先輩」授業				○								○
進路探究 WEEK						○	○					
丹波イングリッシュキャンプ					○							

＊以下の項目は、新型コロナウイルス感染症拡大により中止した。
・ケント市、オーバン市（アメリカ）における研修：７月派遣
・金海外国語学校（韓国）：８月派遣、２月受入
・パンニャサストラ大学（カンボジア）における研修：８月派遣
・在住外国人との共生：５月～２月

（２）実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

Ⅰ年生　総合的な探究の時間「丹 BAL Ⅰ」

・知の探究コース　研究テーマ

「丹波で農業を堪能しよう」「丹波に人を！～みんなが楽しめる複合施設を考える～」「アウトドアで丹波を活性化～地元・観光～田舎の良さを最大限に活かせる街づくり」「犬が鹿肉を食べるメリット」「丹波の魅力　丹波栗を広めるために」「丹波市の人口を増やすには」「丹波三宝（小豆・黒豆・栗）をすべて盛り込んだスイーツを食べたいと熱望していた高校生たちが試作品を作り続けたら和菓子職人と外国人シェフを巻き込みだして地域活性化に向けて動き出した件」「丹波市の観光人口をどうすればふやせるか？」

・一般クラス　研究テーマ

「市民活動・地域づくり」「移住関連事業」「丹波の魅力」「丹波での仕事・起業」「丹波の三宝・地域の特産物」「丹波布」「薬草」「酒」「丹波の森林・生態系」「丹波の自然」「丹波竜」「鹿肉（ジビエ料理）」「丹波市行政の取組」「空き家活用・地域づくり」「教育」

２年生　総合的な探究の時間

・知の探究コース「探究Ⅱ」研究テーマ

「効果的な復習方法の考案～数学Ａユークリッド互除法を用いて～」「意欲的に参加するための授業形態の提案～洋楽を使って目指せリスニング力ＵＰ！」「カンボジアの算数教育から学ぶ～楽しく意欲の湧く学びづくり～」「数学における協働学習が生徒の学習に及ぼす影響について～数学Ａ及び数学Ⅱの授業を事例にして～」「長崎さるく的まちあるきの実践～学校での共通体験を通した在丹外国人との信頼関係の構

築のために～」「ＨＳＰと上手に付き合う方法～自分の長所に変えていくには～」「十人十色～丹波市に同性パートナーシップ制度を導入するために～」「川裾祭とホトケドジョウとフェスが大好きな高校生たちが提案する祭のカタチ－地域伝統と生物多様性と多世代交流に焦点を当ててー」「丹波市における犬、猫の殺処分の現状とその改善策の研究」「文化を残す必要性について考え、方言を後世に残すことを目的とした探究活動」

・一般クラス「丹 BAL 台湾」

(ｱ) ディスカッション（台湾の高校生との交流前後や、講演会後）

・台湾の歴史、台湾の高校生について知りたいこと、伝えたいこと

・日本文化について（動画作成）

・日本の防災について（動画作成）

・台湾と日本の防災の違いについて

・書籍、講演会、交流を通じて学んだこと

(ｲ) 講演会や参考文献による台湾学習

・後藤みなみさん講演会「台湾　日本　人生」

・野嶋　剛さん講演会「台湾からいま日本人が学ぶべきこと」

・夏休み課題図書『台湾とは何か』野嶋剛著（ちくま新書）

(ｳ) 台湾の高校生とのオンライン交流

・台南第一高級中学、治平高級中学とのオンライン交流を２回実施。

・互いに作成をした動画を視聴し、感想や意見交換を実施。

３年生

・総合的な探究の時間

自己の適性に応じた進路選択に向け、企業・大学（学部・学科）等、進路希望に関連づけて探究させた。また、小論文指導を通して、文章作成能力の向上を図った。

・選択科目「グローカル」

授業では、探究活動、動画作成、英語でのプレゼンテーションやディベートを実施し、海外とのオンライン交流を実施した。

特に今年度は、１２月の「グローカルサミット」の運営や発表に取り組んだ。県内３校、県外２校、海外３校（台湾の台南第一高級中学・治平高級中学、韓国の金海外国語高校）の合計８校が参加した。サミットの実施に向け、オンラインで、互いの考えや意見を出し合い、交流を深めてきた。当日は、各校がそれぞれ英語で発表し、質疑応答も含め、すべて英語で行った。英語だけでやりとりすることを重ねる中で、語学力が向上し、コミュニケーション力にも自信をつけるなど、成果をあげた。

インターアクト部

・韓国とのオンライン交流

金海外国語高校との交流活動を、３学期にオンラインで２回実施する予定である。日本語文化研究部の生徒との交流であり、日本語で実施する。交流を通して韓国への理解を深めていく。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な探究の時間，学校設定教科・科目等）

以下の教科・科目において、地域との協働による探究的な学びを推進した。

１年生　総合的な探究の時間「丹 BAL Ⅰ」

２年生　総合的な探究の時間

・知の探究コース「探究Ⅱ」

・一般クラス「丹 BAL 台湾」

３年生　総合的な探究の時間「総合Ⅲ」、選択科目「グローカル」

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ，教科等横断的な学習とする取組について

３年生選択科目「グローカル」を知の探究コースと一般クラスを対象に開講し、１・２学年の２年間取り組んだ探究活動を継続できるようにしている。英語によるプレゼンテーションやディスカッションを行い、海外に向けて発信する力の育成を図った。

また、藤江康彦教授（東京大学大学院）を講師に招き、職員研修を２回実施し、探究的な学びを授業に取り入れることについて研修することで、教職員の意識改革を図った。教科横断型授業についての研究授業を実施し、授業公開週間に教科横断型授業の実施を試み、教職員への浸透を図った。

④類型毎の趣旨に応じた取組について

知の探究コースの生徒に、課題研究発表等に率先して取り組ませながら、一般クラスの生徒も含めて課題研究発表等に参加する機会を増やした。

⑤成果の普及方法・実績について

・発表実績

12 月 11 日　福知山公立大学主催田舎力甲子園　奨励賞

12 月 19 日　甲南大学リサーチフェスタ 2021　２年知の探究コース１０グループ発表

1 月 29 日　Glocal High School Meetings 2022

【全国高等学校グローカル探究オンライン発表会】

日本語部門「金賞・文部科学省初等中等教育局長賞」受賞

1 月 30 日　全国高校生　MY PROJECT AWARD 2021　マイプロジェクトアワード

関西 Summit

3 月 19 日　WWL・SGH×探究甲子園

8　目標の進捗状況，成果，評価

全国及び地域での研究発表への参加は、平成 30 年度４大会、令和元年度９大会に出場したが、今年度も新型コロナウイルス感染症のため、中止されたものもあった。オンラインで実施された発表会には積極的に出場し、Glocal High School Meetings 2022 では日本語発表部門「金賞」、福知山公立大学主催田舎力甲子園「奨励賞」を受賞した。

また、今年度は、台湾、韓国を中心にオンラインによる交流を実施した。オンラインでの海外交流により、２年生では全員が海外の高校生と交流の機会を持つことができた。台湾、韓国に加え、カンボジアの学校とのオンライン交流が、今後開催できる見通しである。

昨年度開講した選択科目「グローカル」では、生徒が２年間取り組んだ探究活動に継続して取り組むことで、研究内容を深化させ、さらに英語でのプレゼンテーションやディベートを行い海外に向け発信するなど、成果を上げている。グローカルサミットの運営や発表を行い、成功に導いたことは、生徒にとって大きな自信となっており、さらに教室でオンライン視聴した１・２年生にとっても、英語学習意欲の向上へとつながった。

・外部検定への取組推進

（卒業時における生徒の４技能の総合的な英語力として CEFR の B1～B2 レベル以上の生徒の割合を 25%にする取組み）

平成 30 年度 10%→令和元年度 15%→令和２年度 15%→令和３年度 16%

・研究授業を含めた地域課題研究に関する研修会を充実させる取組（目標 10 回）

平成 30 年度４回→令和元年度８回→令和２年度 10 回→令和３年度 10 回

・グローバルな社会又は地域課題に関する公益性の高い国内外の大会に参加する生徒を増やす目標（目標 100 人）

平成 30 年度 40 人→令和元年度 80 人→令和２年度 84 人→令和３年度 84 人

・課題研究に関して地域人材の参画を促す。（参画する延べ人数目標 70 人）

平成 30 年度 40 人→令和元年度 80 人→令和２年度 90 人→令和３年度 116 人

9　次年度以降の課題及び改善点

カリキュラムの研究・開発について

（１）令和４年度入学生から、総合的な探究の時間を知の探究コース、一般クラスともに第２学年で２単位にする計画である。その運営について、検討を進めていく。

（２）選択科目「グローカル」に関わる教科を広げ、課題研究をより深化させながら、教科横断型の授業の取組をさらに進めていく。

今年度の活動実績

研究推進部長　丹生　憲一

1　はじめに

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローカル型)」の指定最終年となった。一般クラスにも導入した地域課題を題材とした総合的な探究の時間「丹 BALI」は、昨年度は新型コロナウィルスの流行に伴い、大幅に活動が制限されたが、今年度、ようやくその流れを作ることが出来た。2 学年での「丹 BAL 台湾」は海外への修学旅行ができない今も、オンラインによる交流を盛り込むことで交流の場を保ち、修学旅行のテーマを防災としたことで発表内容に深みを持たせることができた。3 学年の「総合Ⅲ」も昨年は大幅に内容を変更せざるを得なかったが、今年度、他己紹介、面接練習、小論文という一連の活動ができた。選択科目「グローカル」も 2 年目を迎え、昨年の流れを踏襲しながらより質の高い作品ができたように思う。校外の発表会では「Glocal High School Meetings 2022」の日本語発表部門において、金賞・文部科学省初等中等教育局長賞を受賞した。最終年度に最高の賞が勝ち取れたことは大きな自信となった。

来年度、事業の指定が外れても「丹 BAL Ⅰ」で得た地域の人たち、「丹 BAL 台湾」で培った講師の先生や海外の学校とのつながりを大切に、お金をかけなくても日常的に地域・世界のことに目を向けて関わっていける環境づくりができると確信している。

2　丹 BAL（柏原高校の総合的な探究の時間）

(1)「丹 BAL Ⅰ」

昨年度は新型コロナウィルスの影響で、休校が続き開始が 6 月になったため、導入や基礎学習が不十分なまま始まった地域学習であったが、今年度は 4 月から取り組むことができた。昨年度、初めて 10 人を超える講師にお世話になりながら、専門外のことで関わっていただかなくてはならなかったこと、本校教員と外部講師の連携が不十分だったことなどを改善するために、本校教員 2 人が 3 人の外部講師とチームを組んで、30 人程度の生徒（6～7 班）を担当する形を取り、2 か月に一度はオンラインミーティングを開いて意思疎通を図った。「丹 BALI」という名称で「丹波地域の魅力を考える」ことを共通の話題にし、育みたい力も統一しつつ、一般クラスと知の探究コースではねらいと手法を変えた。3 年間通じての「総合」「探究」のねらいは次のようにまとめている。

	「総合」	「探究」
ねらい	様々な角度から、世の中のことを学び、自己実現につなげる。	地域課題について学び、世界的課題と結びつけ、問題解決方法を提言する。
育む力	「読む・聴く」「伝える」「考える」「発表する」	
活動	文献講読・講演会・フィールドワーク・ディスカッション・プレゼンテーション	

一般クラスでは、「私達の考える『地域の魅力』」を取り上げ、（地域に・日本国内に・海外に）発信することを活動の柱にした。知の探究コースは、魅力の発信にとどまらず、そこから見出される課題を解決する方法を模索し、論文にまとめ、提言することを最終的な目標にしている。テキストも、一般クラス「探究×SDGｓ　地域の課題をキャリアにつなげる」（朝日新聞社）を、知の探究コースは「課題研究メソッド Start book」（啓林館）を用いた。

学期	月	内容	形式・テキスト・講師
1	4	オリエンテーション週間 「探究について」「SDGｓとは」（KJ法） 「地域の魅力は何だろう？」 （ディスカッション・発表） 「柏原高校の歴史」（講演会）	全体　「探究×SDGｓ」～p19 「課題研究メソッド」 序章～「情報を集めよう」 ＊新聞記事の利用について 大西伸弘元校長先生
	5	プレゼン講座 （プレゼンテーション作成）	全体　小川周平先生 紙芝居形式
	6	「丹波の魅力をおすそ分け」 （プレゼンテーション準備）	講座別・班別 「探究×SDGｓ」P23~25
	7	第1回発表会	講座別
2	8	フィールドワーク （データ収集・インタビュー・体験）	講座別・班別
	9	「丹波の魅力をおすそ分け」 （ディスカッション）	講座別・班別 課題を考える
	10	「丹波の魅力をおすそ分け」 発表準備・スライド、文章作成	講座別・班別 課題解決策を考える
	11	第2回発表会	講座別プ～代表決定
	12	学年発表会	学年代表決定
3	1	文章講座（レポートの書き方） 「地域課題から世界を考える日」	講座別 全校　1月28日（金）
	2	文章作成	活動のまとめ

（2）「丹 BAL 台湾」

当初は台湾への修学旅行の事前学習も兼ねて始まった、総合的な学習（探究）の時間を使った台湾学習であるが、昨年度は修学旅行の中止が決まり、生徒のモチベーションが案じられた。しかし、2回行ったオンライン交流は好評で、直接会えなくても海外の高校生と交流する機会の大切さを痛感した。そこで、今年度は学年からの要望もあり、オンライン交流を軸とした活動に切り替えた。年度当初は3回の交流を予定していたが、台湾での休校が長引いたために6月予定の交流は中止となった。そこで、自己紹介動画を交換することに切り替え、2学期に2回オンラインミーティングを開催した。校内のネット環境が不十分であったり、我々の不慣れもあったりして、1回目は繋がれない班が出たが、2回目は問題なく繋げることができた。

この交流に先立って、6月には学年が人権学習の一環として、八田與一さんを扱った映画「バッテンライ」を鑑賞し、7月には後藤みなみさんによる講演会を開いた。夏休みの課題図書として「台湾とは何か」（野嶋剛　ちくま新書）を講読し、与えられた課題に取り組んだ。オンライン交流の後には野嶋剛先生の講演を聴き、今日の台湾について文化的、政治的な観点からの情報を得ることもできた。

学期	月	内容	形式・テキスト・講師
1	4	オリエンテーション 「自己紹介」「台湾の歴史」「台湾の高校生について知りたいこと」 （ディスカッション）	全体「丹 BAL 台湾」について クラス別　班別
	5	「1年生の総合で研究した内容」 （ディスカッション）	クラス別　班別
	6	「日本紹介動画」（動画作成）	クラス別　班別
	7	講演会	全体　後藤みなみさん
2	8	「台湾とは何か」（文献講読）	
	9	台湾文化ビデオ鑑賞 オンライン交流①	クラス別　班別
	10	「日本の防災」（動画作成）	クラス別　班別
	11	オンライン交流② 講演会	クラス別　班別 全体　野嶋剛先生
	12	「丹 BAL 台湾を通じて」 （ディスカッション・発表準備）	クラス別　班別
3	1	発表会（クラス　学年） 「地域課題から世界を考える日」	クラス別　全体 全校　1月28日（金）
	2	記録集作成	クラス別

（3）「探究Ⅱ」

1年次は班ごとにテーマを決めて探究を進めてきたが、2年次の最初に個人で取り組みたいテーマを決めて、よく似たテーマを持った生徒が集まって活動班を形成した。新たな試みとしては、自分のテーマに関する論文を検索し、数本の論文を読むことから研究を始めた。その結果、以下の10班に分かれた。

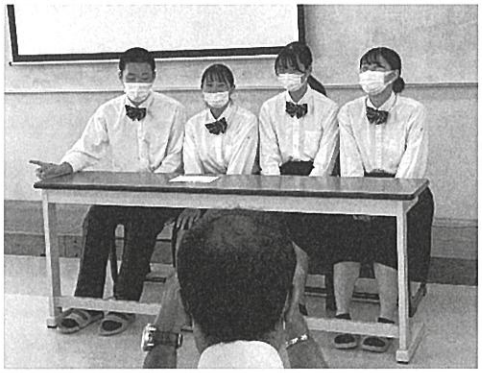
1	教育	効果的な復習方法の考案 ～数学Aユーグリットの互除法を用いて～
2	教育	意欲的に参加するための授業形態の提案 ～洋楽を使って目指せリスニング力UP！～
3	教育	カンボジアの算数教育から学ぶ ～楽しく意欲の湧く学びづくり～
4	地域・社会	長崎さるく的まちあるきの実践 ～学校での共通体験を通した在丹外国人との 信頼関係の構築のために～
5	教育	数学における協働学習が生徒の学習に及ぼす影響について ～ 数学A及び数学Ⅱの授業を事例にして～
6	生物・健康・医薬	”HSPと上手に付き合う方法 ～自分の長所に変えていくには～”
7	地域・社会	十人十色 ～丹波市に同性パートナーシップ制度を導入するために～
8	言語・文化	文化を残す必要性について考え方言を後世に残すことを 目的とした探究活動
9	地域・社会	川裾祭とホトケドジョウとフェスが大好きな高校生たちが提 案する祭のカタチ -地域伝統と生物多様性と多世代交流に焦点を当てて-
10	地域・社会	丹波市における犬，猫の殺処分の現状とその改善策の研究

（4）「総合Ⅲ」

3学年の一般クラスは、3年間の活動の総括として「自己実現につなげる」ための活動を行った。1学期には「他己紹介」「相互面接練習」により「伝える」「聴く」を実践した。2学期には分野別に分かれた小論文練習を通じて、「書く」ことで表現した。後から生徒の振り返りにみられるように、「他己紹介」は好評だったようで、同じクラスにいても普段は知りえない側面を垣間見る機会になったようである。

（5）「グローカル」

3学年の選択科目として開講している「グローカル」は知の探究コース4人、一般クラス4人の計8人が受講した。知の探究コースでは、2年次まで取り組んできた研究内容を英語の論文にして発表することを柱にしながら、今年度はグローカルサミットの進行、発表をこの4人に任せた。一般クラスは昨年までと同様、スピーチ、学校案内動画作成、ニュース番組制作、プレゼンテーションの4本立てで英語を用いた発表を活動の中心においた。

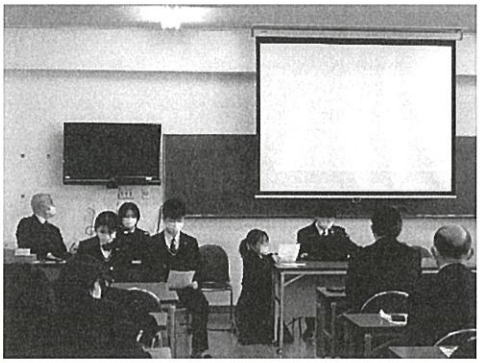


3　グローカルサミット

今年度、事業最終年度の目玉は12月末に行った「Glocal Summit 2021 at Kaibara」であった。国内5校、海外3校がオンラインで繋がり、「コロナ禍が去った後、私たちはいかに生きるか」というテーマで話し合った。前述したように3年生のグローカル選択者が2か月前から準備を進め、各校とオンラインミーティングを持ってそれぞれのトピックを決め、発表動画を事前視聴した上で当日の意見交換に臨んだ。全校生は各HR教室でその様子を視聴しながら、記録を取り、自分達がどう生きるかについて論述した。

4　地域課題から世界を考える日

1月28日にオンラインで全校発表会を開催した。1学年の「丹BAL Ⅰ」から5組、2学年の「丹BAL台湾」から3組、「探究Ⅱ」から4組が発表した後、Glocal High School Meetingsに出場した日本語部門と英語部門の2組が発表した。司会は放送部が全て行い、スムーズな進行ができた。昨年に引き続き、オンライン開催となり国内のグローカル指定校はもちろん、台湾、韓国の交流校からも入室があり、文字通りグローカルな発表会にすることができた。



5　ポスト「グローカル事業」の丹BAL

この3年間で本校の総合的な探究の時間は大きく変わった。変わらざるを得なかったところもあった。まず、知の探究コースの看板であった探究活動を一般クラスにも広げ、地域の魅力・課題について全校生徒で考えるようになった。「丹BAL」という愛称は校内でも日常的に使われるようになった。以前は個人的な人脈に頼っていた地域の人たちとの関わりは、NPO法人Imagine丹波の協力を得て組織的なものへと変わった。高畑先生、杉岡先生に「探究」時代から受けてきた助言、指導が随所で実を結んできたのを感じる。「丹BAL台湾」は台湾学習にとどまらず、台湾の高校生との交流、台湾と比較して自分達のことを知るという活動に進化している。もちろん、これは修学旅行で台湾に行けなくなったことが引き金ではあるが、オンライン交流を柱とし、スマートフォンやタブレットを利用した動画作成など、新しい試みを取り入れてきたことが功を奏した。昨年、この稿で「コロナだからこそできることを」「コロナがあってもなくても」という書き方をしたが、「コロナがあったから、進歩した」ことも増えた。

しかし、課題は残っている。「丹BAL」を、この学校の看板にしていくには、より多くの職員が探究活動に意義を見出し、各教科の学びと関連付けながら教育活動を進めていく必要がある。探究活動を売りにしてきた知の探究コースは、一般クラスでも探究活動に取り組み始めた今、差別化に別の要素が必要になってきた。コースの存在意義を見直し、本校をけん引する存在にし続けることも新たな課題であろう。コンソーシアムの一角に「丹波市内三校の連携」を掲げたが教員レベルでの取り組みは進まなかった。しかし、生徒達が自主的に取り組んだ「高校生が創る丹波の未来への架け橋プロジェクト」では三つの高校の生徒が手を取り合い、地域の大人を巻き込んで見事ギネス記録を達成した。これを機に、「丹BAL」が本校だけでなく地域の学びとなることを期待したい。

「カリキュラム改革」　　教務部長　和田　好史

柏原高校では2019年度よりカリキュラム改革に取り組んできた。

本校ではすでに知の探究コース（1クラス）で、総合的な学習の時間として、1年生で探究Ⅰ（1単位）、2年生で探究Ⅱ（2単位）を設定し、その中で探究活動を行ってきたが、それに加えて「グローカル」（総合的な探究の時間）創設等のカリキュラム改革、カリキュラムマップの作成に取り組んだ。

1　「グローカル」（総合的な学習の時間）の創設

まず、2020年度から3学年の選択科目に「グローカル」（総合的な探究の時間／2単位）を創設し、知の探究コースと一般クラスの生徒が選択できるようにした。知の探究コースは1年生・2年生の探究Ⅰ・探究Ⅱで行ってきた探究活動の内容を深めていくことに加え、英語を使ったプレゼンテーション・論文作成など、より高度な内容を生徒が自ら行うこととした。一般クラスは1・2年生の総合的な学習（探究）の時間（総合Ⅰ、総合Ⅱ）で十分な探究活動が行えなかった分、少人数に絞ったグループ活動を通して、探究的な活動、動画作成、英語を使った会話などの活動を行う。生徒の能動的な活動が見られ、自ら考え、解決方法を探る学習ができ、確実に成果をあげている。現在は、次年度に向け、一般クラスのグローカルの授業の規模を拡大することに取り組んでいる。あらゆる教科の教師が参加し、少人数グループを増やして、多くの生徒が選択できるようにしていきたいと考えている。また、昨年度からは一般クラスの1年生の総合Ⅰでも探究活動の要素を取り入れ、グループ活動、発表などを行っている。

2　カリキュラムマップの作成

今まで本校では教科ごとに年度当初にシラバスを作成してきたが、2019年度より1学年1シートのカリキュラムマップの作成にかかり、一目ですべての教科の学習内容が月毎に分かるよう示すようにしている。教員が他の教科の内容や時期を知ることにより、教科の枠を超えて協力できる体制をつくることを目標とした。まだ、教科連携することはこれからの課題ではあるが、教科の壁をなくして、一般の授業でも探究的な活動がしやすい環境づくりを行っていきたいと考えている。また、本校では以前からグループ学習・アクティブラーニングを取り入れた授業がある一方で、旧来の講義型の授業も数多く存在している。年2回の授業公開週間を設けて、授業改善に取り組めるようにしているが、まだまだ教師間・教科間の壁は高く、授業参観だけにとどまっているのが現状である。

3　総合的な探究の時間（2年）の時間数増

2022年度からの新学習指導要領の導入にあわせて、一般クラスの総合的な探究の時間の増設と内容の精選を行い、知の探究コースで行っているような探究活動を一般クラスにも導入し、探究活動が全クラス、全授業で行えるために、3年次の1時間を削除して2年次で2時間履修ができるように教育課程を編成し直した。

しかし、実際に授業を運営するにあたっては、まず全教員の意識を変革する必要がある。探究活動を取り入れた授業について研修等で意識改革を進め、一部の教員のみで担当する科目にするのではなく、全職員で関わる科目にすることが必要である。

丹BALについて

鴻谷佳彦　（NPO法人Imagine丹波　代表）

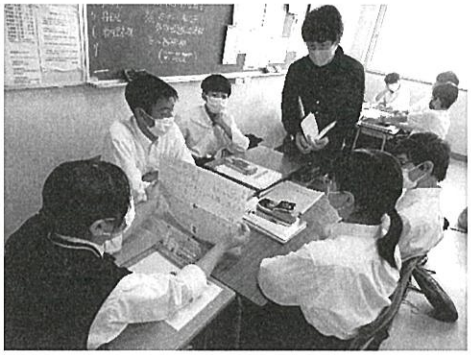
本年度も『グローカルな視点で地域課題解決に主体的に取り組むグローカルリーダーの育成』というテーマの授業に、アドバイザーとしてかかわらせて頂いています。この授業は数年前より始まり、初めは手探りでサポートしてきました。周囲の先生方の理解や協力もあり、徐々に授業にまとまりができてきたように感じます。

現在のコロナ禍において、社会の情勢はこれまで以上に変化を求められる時代になりました。都市部はもちろんですが、地方である丹波市もその例外ではありません。地方の企業においても世界的な新型コロナウィルス流行での社会の変化は、今までの常識を根底から覆すような出来事でした。今、企業は大小問わず変化の時期に立たされています。誰も経験のしたことのない変化の中で、自分で情報を集め、今後の進み方を自分で判断していかなくてはなりません。昔のように王道や定番と言われるセオリーは通用しない世の中になっています。そんな中で、多様な価値観をもつ人々がチームをつくり、協力しながら様々な意見を集約し、試行錯誤を重ねて、精度を高めながら事業を進める力が求められています。

この「丹 BAL」の授業は、まさにその時代にあった試みだと感じます。生徒たちは地域課題を見つけ出し、その課題に対してインタビューやアンケートなどの手法でアプローチしてまとめ、自分たちなりに課題の解決策を提案し、評価・指導を受け改善し、さらに精度を高めていきました。この授業に必要なことは、まさにPDCAサイクルを何回まわせるか？ということに尽きると感じます。何回も計画を立て、発表し、他者の評価から学んで改善し、また計画する…。いかに研究を深める事ができるかが発表の精度を高めていく事につながり、しいては正解に近づいていきます。このPDCAサイクルを回す授業は、教科の勉強にも、変化の激しい社会に出た時にも、必ず役立つ能力になると思います。正解がない、前例がないものに挑むときに有効な能力です。

現在は情報社会と言われ、情報技術の発達によって海外への情報発信も容易になりました。柏原高校では2年生が海外の生徒とオンラインで交流し、様々な問題を話し合っています。新型コロナウィルスもそうですが、SDGs など世界規模で共通の課題に取り組むことも珍しくありません。

このグローバルな取り組みにより、生徒達が感じるであろう海外の多様な考え方も、自分の学びに取り入れて、ひたすらPDCAサイクルを回してもらえたらと思います。その積み重ねが、彼らの広い世界への進出につながることを期待しています。



「丹 BALI」（総合Ⅰ・探究Ⅰ）について～課題と今後に向けて～　Ⅰ学年主任　梶村康人

総合、探究ともに「丹波」について各グループ５人が自分たちのテーマを決めて活動をした。探究については自分が担当したグループにおいては、特別なことをしたわけではなく、基本的には生徒の活動を見守るようなスタンスで行った。「鹿肉」がテーマだったのだが、自分にはそのような知識や経験もなく、手探りの状況であった。それは、総合でも同じで、「黒大豆」や「丹波竜」「酒」など７つのテーマについてもなかなか難しいものであった。各グループの多様なテーマの中、外部講師も必ずしも専門分野ではない方もいらっしゃったが、大変熱心に指導してくださった。生徒は講師の話を熱心に聴いていたが、いざ質問を受けると黙ってしまう場面も見られた。経験不足の面もあるが、失敗を恐れずに受け答えをすることが必要である。

生徒は夏休みにフィールドワークに出かけたり、アンケートを取ったり、多くのグループが自分たちで考えて活動をしていた。中には、一人に負担が集中することもあったが、発表原稿の作成や最後の「論文」作成など各自でしなければならないこともあり、次第に全員が自分のすべきことをするようになった。

今回の課題は、青写真が見えない、ゴールが見えない中で始まったことである。年間計画の提示と、何をするのかというイメージを担当者で共有することが必要であろう。また、１単位という限られた時間での活動で、多くのことができなかったという印象である。例えば、丹波新聞を提供してくださったが、もっとじっくりと読む時間が欲しかった、SDGｓのテキストももっと活用したかったが、時間がなかった。何を中心に行うかを決めて取捨選択することが必要である。

生徒は丹波を考える中で、今まで考えもしなかったことを考え、データを集め、講師の話を聴き、発表をする中で学びを深めようとすることができた。２年次においては更に発展的な学びができるようにしていきたい。最後に生徒が書いた「論文」については、来年からの活動に大いに役立つはずである。そのストックをもとにこの探究活動が後輩に引き継がれ、更に良いものが生み出されることを期待する。

丹 BAL Ⅰ 「『地域の魅力』とは」　　西本　秩抄

自分たちが住んでいる「丹波」の魅力とは？そう聞かれた生徒たちは「豊かな自然」、城や祭り、丹波布などの「観光」や「伝統工芸」、小豆や黒豆などの「食」に関するものを挙げる。ではそれを自分たちはどれくらい知っていて、そこからどのような課題に取り組んでいくか？各人の興味関心をもとに５人の班を作り、探究活動に取り組んだ。

まず６月に自分たちが考える「丹波の魅力」についてのプレゼンを行った。しかしなかなか既存の知識から抜け出せない。講師の先生方からは知識を広げる方法について様々な助言をいただいた。そこから「なんとなく」だった知識を徐々に深めていき、次にその魅力が持つ「課題」を考えた。多くの班がその魅力を「伝えたい」「知ってもらいたい」ということを課題とし、７月に中間発表を行った。そこでは「誰をターゲットにするのか」「知られていないことを裏付けるデータは？」などのアドバイスをいただき、課題をより具体的にする必要性を感じた。また、夏休みのフィールドワークでは、実際に見、体験し、話を聞くことで、自分自身でその魅力に触れることができた。そうすることで今までは身近でありながらどこか「よそごと」であったものを、ようやく「自分事」として捉えられるようになった。そして２学期は、フィールドワークで得た知識やデータを基に、「課題解決のために自分たちができること」について時間をかけて考えた。ブレインストーミングで出した様々な案の中から効果や実現可能性をふまえて絞り込み、12 月に最終発表を行った。

最終発表では、１学期からの知識の深まりのみにとどまる班もあったが、反面、具体的で現実味のある提案や、高校生ならではの提案で、講師の先生方に興味をもっていただけたものもあった。今回は、提案するところで１年が終わったが、さらに提案したものを実践するところまでいければ、生徒自身もさらに充実感を感じられたのではないかと思う。しかし、そこまで行うには、時間的に足りないのが実際である。

今年度の活動を通して感じたことは、「意識付けの大切さ」である。この１年の最終的なゴール（地域の魅力から課題を発見し、その解決策を考えていくということ）までを最初にきちんと提示し、各自がそれを意識しながら、始めに地域の魅力を考えていくことで、最初から自分事として取り組んでいくことが出来たのではないかと感じた。

３学期にはこの１年の取り組みを後輩に伝えようと、班ごとに自分たちの取り組みをレポートにまとめた。これが、今後の後輩たちの活動の参考になればと思う。

探究Ⅰを担当して　～問いをつくること～　　Ⅰ年Ⅰ組　担任　畑中　弘

Ⅰ年生の探究Ⅰを担当して振り返ってみると、問いをつくる作業は大変であったが、その作業が最も重要であったと感じている。抽象度の高いものからより絞り込んだもの、そしてリサーチクエスチョンへと進み問いをつくっていくのだが、その作業は決して直線的に進むものではなくかなりの紆余曲折を経ていくことになった。私が担当した班の状況をここに記述する。地域の課題を考える中から「農業」というキーワードが出てきた。最初は「丹波の農業について」というかなり漠然とした状態でスタートし、課題と魅力を調べ始めたが、その中で耕作放棄地が年々増加していることや農業従事者が高齢化し減少していることが課題として浮かび上がった。自分たちが調べたことをもとにして外部講師の方と丹波の農業の現状について意見交換をする機会をもつことで、ネットや資料で調べたことと現実とが少しずつ繋がり実感としてつかめるようになっていった。そこで課題を絞り込んで「耕作放棄地を減らすにはどうすればよいか」を考えていくことにし、「週末農業」というキーワードが浮いてきた。ここまでがⅠ学期の取り組みであり、これをもとにして夏休みに2か所のフィールドワークに出かけた。Ⅰつは婦木農園、もうⅠつは農（みのり）の学校である。どちらも丹波市の農業の先進的な取り組みをされていて高校生の取り組みにも理解があり協力していただけるところであった。

2か所のフィールドワークを終えて生徒たちが感じたことは、耕作放棄地を減らすことはそんなに簡単な問題ではないということ、そして週末農業を実現させることも難しいということ。実際に丹波市の農業に関わっている方に接することでこの問題の困難さが解り課題解決に向けて描いていた週末農業の実現という展望も見えなくなるという状況になってしまったのである。そこで、フィールドワークの聞き取りを含めて丹波市の農業の抱える課題と魅力をもう一度整理しなおして今後の取り組みを考えてはどうかとアドバイスをした。実現するには厳しいと言われている週末農業であるが、だからこそ高校生目線でその方法を考える価値があるのではないかと背中を押してみた。整理をしていくと都市部からの距離の問題が障害になっていることに気づき、都市部からの距離によって週末農業はどのような影響を受けるのかを調べることになった。そして、丹波市を都市部からの中距離と位置付けて「都市部からの中距離型週末農業は成立するのか」という問いを立てるに至った。この問いをたてた後は、都市部からの距離を基に地域を分けて比較し、都市部から中距離にある丹波の距離的なハンデをどのように埋めていくか、どのような付加価値をつけていくかなど生徒たちはグループで話し合いながらどんどん研究を進めることができるようになっていった。

このような経過を振り返ってみると、教員も最初から着地点が見えているわけではない。抽象度の高いものを焦点化していく過程には、教員から生徒への問いかけや外部講師との意見交換を通じて何が重要であるかに気づき言語化していくという活動が必要であった。更に、今回の例で言えば2か所のフィールドワークを行ったことは、調べたことと現実とを比較し問題点を鮮明にするためには有効であった。教員側においては毎週の探究の授業の打ち合わせにおいて授業の振り返りをすることで気づきがあり、それを生徒へフィードバックすることができたことは効果的であった。探究活動において問いをつくる作業は重要であり、生徒と教員が相互に関係しながら時間をかけてやらなければならない作業であると考える。

台湾を学ぶ大切さ、そして、柏原高校に送った「讃！」

ジャーナリスト・大東文化大学特任教授　野嶋 剛

2021 年 11 月、兵庫県立柏原高校を訪れた。一昨年、昨年に続く 3 度目の来校になる。東京から新幹線と福知山線に乗り換えておよそ４時間。列車が柏原に近づくと、懐かしさを覚えるようになった。秋の丹波は美しい。そのなかで、台湾について学びを重ねた２年生の皆さんにお話することが毎年の楽しみになっている。

残念ながら、新型コロナのため 2021 年の台湾修学旅行も実現しなかった。生徒の皆さんも、教員の方々もさぞかし残念だったと思う。ただ、何事もマイナスをプラスに転じるにはどうすればいいのか考えていく、そうした前向きな発想が必要だ。

幸い、生徒の皆さんには拙著『台湾とは何か』（ちくま新書）をテキストとして使ってもらっている。この本は、大学生や社会人に台湾入門書として読まれている本だが、一生懸命読み込んでくれていることは毎年の講演を通してよく知っている。この本を 2016 年に執筆した理由も、日本の若い世代で台湾への理解がもっと進んで欲しい、という願いがあったので、私にとっては非常に嬉しいことだ。

そこで生徒の皆さんは私の本の学びを通して、台湾に関する一定の基本知識は備えていると考え、今年の講演では、「台湾からいま日本人が学ぶべきこと」というタイトルとして、実際に行くことはできなくても、できるだけリアルな台湾に近づいてもらえるよう、台湾の最新情報を盛り込んだ動画をたくさん用意し、台湾の新しい部分、若者にも興味が持てる部分にスポットがより当たるような内容にした。

具体的に講演で取り上げたのは、台湾社会で進んでいる多文化主義、同性婚合法化などの LGBT 問題、そして、非常に活発な若者の政治参加である。講演の直前に行われた 10 月 10 日の台湾国慶節（建国記念日）で、台湾に 17 いる先住民族からそれぞれの民族衣装に身をまとった歌手が登場し、一つの曲を全員一緒に歌う場面を動画でお見せした。ほかにも台湾の多言語使用の様子や同性婚の合法化のときに若者が喜ぶ姿などを紹介した。

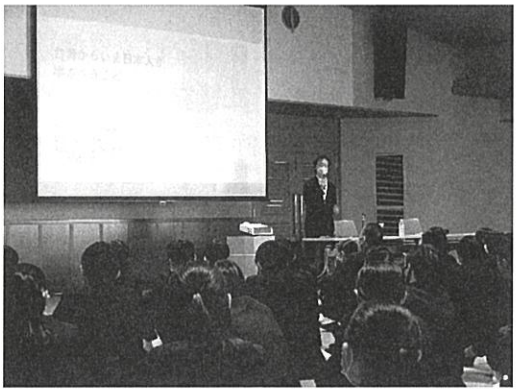
そのうえで、生徒の皆さんに強調したのは、台湾について考えることの大切さだ。昨今は東日本大震災への台湾の 200 億円もの義援金への感動を含めて、日台間の相互感情は現在きわめて良好で、人的往来も活発に行われ、台湾への注目度は高い。

そんな台湾と日本は 50 年間におよぶ植民地統治など複雑な歴史を経てきた。台湾は戦前から 2000 年ごろまでのおよそ 100 年間にわたり、経済的にも、社会制度的にも、日本の後ろを歩いている存在だった。日本はアジアで最も先進的な国、それが私を含めた大人たちの世代の共通理解だ。しかし、いまの台湾をフラットな目で見てみると、まったくそんな価値観は通用しなくなり、台湾が日本よりはるかに進んでいる部分も多い。

最近は、すぐれたコロナ対策で感染の広がりを抑え込み、世界の注目を集めている。台湾の IT 担当大臣、オードリー・タンさんも日本では大人気だ。そうした台湾の「先進性」には今の日本に足りないものもたくさん含まれている。私自身も、日々、台湾の進化に目を見

張り、学んでいることが多い。生徒たちには、台湾に学ぶ大切さを私の講義を通して実感してもらえることを期待している。

台湾修学旅行は高校時代には叶わなかったが、大学や社会に進んだあと、自ら機会を作って日本の貴重な友人、台湾を訪れ、台湾を知ってもらいたい。講演では「台湾はみなさんを待っています」と語りかけた。台湾では誰かに賞賛を送る時、「讃（zang)」という言葉を使う。台湾の学びを続けた柏原高校の皆さんに私からの「讃」を送って講演を締めくくった。



「今日の講演を通して、自分が将来台湾に行った時にやりたいと思ったこと」

2年4組　坂上花音

多文化をリスペクトする台湾であることを知ったので、訪れた際には意識して感じてみたいと思いました。電車でのアナウンスは特にそれを感じられると思うので一度聞いてみたいです。台湾の人々が多文化をリスペクトするのと同様に、私達日本人にとっても台湾や他国の文化を尊重することが大切だと改めて感じました。台湾に訪れる時には中国語や台湾語を少しでも覚えて、声に出して伝えたいと思います。今、学校の交流で繋がっている台湾の学生は熱心に日本語を勉強して、一所懸命に伝えようとしてくれます。その姿を見て、嬉しくなりました。台湾の人たちは温かいです。私も同じように思ってもらえるように、「リスペクトしている」という気持ちを伝えたいと思います。

2年4組　北野早紀

私がやりたいと思ったことは 3 つあります。一つ目は電車に乗って、駅に到着するかなり前から流れるという 4 か国語のアナウンスを聞いてみたいです。2 つ目は、それぞれの少数民族の歌う歌を聴いてみたいです。講演では動画を流していただきましたが、とても歌声がきれいで、どの民族も大切にされていると心が温かくなったので、ぜひ自分の目で見て自分の耳で聞いてみたいと思います。3 つめは台湾の食べ物を食べてみたいです。中国のそれぞれの地域の食文化を取り入れているのは、多文化社会の台湾ならではだと思います。食のマナーはどの地域、国のものを取り入れているのか気になります。

「丹 BAL　台湾」特別講演を終えて

中華民国留日神戸華僑総会 副会長　　後藤　みなみ（王　淑麗）

令和３年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）特別講演会にお招きいただき、ありがとうございます。７月 14 日に「台湾　日本　人生」と題して、母国「台湾」の歴史文化、また来日後の生活のなかで、感じとったことなど「元外国人の視点からみた日本とは」について、２年生のみなさまにお話しいたしました

講演会は、ちょうど東京オリンピック開催の直前でしたので、台湾が「CHINESE TAIPEI」の名前で、国旗も使えず、五輪旗で参加せざるをえないことを問題提起いたしました。「くに」とはなにか、帰化申請許可で日本国籍取得した私は「なにじん」なのかという疑問に苛まれている私の心境を語りました。国籍、アイデンティティについて考えていただくきかっけとなれれば幸いです。

今の台湾は活気にあふれています。2016 年５月に台湾初女性総統蔡英文が就任し、2022 年現在２期目を務めています。国交ある国は、世界にわずか１５か国しかない中、コロナ禍にあって、「ＴＡＩＷＡＮ　ＣＡＮ　ＨＥＬＰ」のキャッチフレーズのもと、積極的に友好国にマスクやサーモグラフィーを寄贈し、国内での新型コロナ・ウイルスを封じこめられました。にもかかわらず世界保健機関（WHO）には加入が認められていません。日本政府からは台湾へのワクチン製剤を提供し、お互いに助け合える関係にあることが再認識されました。台湾の人々は積極的に政治参画をしています。とくに、若者重視の政策を進め、ＩＴ政務大臣に 39 歳の唐鳳（オードリー・タン）を抜擢し、開かれた政府、地域創生、多文化共生に努め、アジアで初めて同性婚を合法化しました。台湾学習を通じて、日本と台湾に関心を持ち、日本の良さを知り、日本が大好きになる高校生が増えればと期待します。

昨年度からコロナ禍の影響で、台湾へ修学旅行がいけなくなりましたが、私の故郷・台南の国立台南第一高等学校、桃園市の私立治平高等学校日本語学科の生徒たちとリモートではありますが、いまも盛んに交流していることを大変うれしく思います。高校生たちがそれぞれの「学校紹介」「自分の町の魅力紹介」「高校生生活の好きなこと」などを通じて、異文化交流を深め、相互理解を図ることは大変良い刺激になっているかと思います。

近年、日本から台湾への留学が増えてきているとＮＨＫも取りあげるほどの人気ぶり。微力ながら台湾を知ってもらえることで、自分の国日本について考え、日本が好きになれれば と考えています。日本と台湾の高校生が、国際理解、異文化体験などを通じて絆をより強固なものにし、「多文化共生社会で自分のできることは」「外国人の人権は？」などについて考えるきっかけとなれれば幸いです。

一日も早く台湾への修学旅行が再開し、対面交流ができますことを心から願っています。

国境を越えた友情

オンライン交流を行った治平高級中学が、学校のFacebookページに以下のような記事と感想を掲載してくださったので紙面を割いて紹介したい。

去年の９月から、大溪日本語ガイドセンターのおかげで、我々は兵庫県の丹波市にある柏原高校とビデオストリーミングで交流活動を始めさせていただきました。

この度は我々が初めての学校間のネットワークを利用した交流活動です。自己紹介の時、みなさんが楽しく踊ることやピアノ弾き語りなどだけでなく、お互いに自らの高校の生活や有名な観光地も紹介しました。温度がないスクリーンを通しても、初めての交流でわくわくする気持ちも依然として感じられました。

治平高校で会えると思ったんですけれども、コロナウイルスのため、ビデオストリーミングでしかお互いの文化や友情を伝えられません。９月１４日には今年１回目の交流会でした。交流のテーマは異文化の交換というのです。お互いに２分くらいの動画を作成し、柏原高校の学生さんは丹波市の特産や恐竜の化石を紹介した一方、我々は桃園大溪で有名な食べ物や桃園神社の歴史や客家文化などについて紹介しました。11月２日は２回目の交流会でした。交流のテーマは防災及びコロナウイルスです。阿蘇火山と桜島火山の噴火を中心に紹介していただきましたが、火山噴火の恐れがない我々にとっては、とても貴重な経験になりました。それに対し、台湾における様々なコロナの対策のみならず、経済においての産業の変化や日本からいただいたワクチンの寄付への感謝する気持ちなどを発表しました。

正直に言うと、日本語が流暢に話せないことや文法が間違ったのかも心配しましたが、いつも肯定してくださいまして誠にありがとうございます。また、「ＫＩＮＧ」及び「校長通信」に交流活動を記録してくださいましたし、更に我々の大溪撮影作品も展示させていただき、本当に心から感謝申し上げます。国境を超えたこの2000キロ隔たっている友情を大切にしていて、早く会える日を楽しみにしています。柏原高校、どうもありがとうございました。　　（以下は治平高校の先生方、生徒達の交流感想）

治平高級中学校校長　　徐　享鵬　先生

柏原高校の先生や生徒と交流でき、大変うれしく思います。毎回違うテーマで柏原高校の生徒の作ってくれたパワーポイントからおもてなしの心が込められているのを感じました。コロナが厳しい状況においても、このような珍しい交流機会があり、治平高校の生徒はとても幸せだと思います。さらに本校の生徒が撮影した作品を柏原高校に展示していただき、誠に感謝しています。コロナが落ち着いた際には、皆さんが桃園大溪を見学し、台湾の美しさを味わい、さらに治平高校にもおいでになって我々の情熱を感じられるように期待しています。

日本語教諭　　林　美雲

柏原高校との交流は二年目になりました。一年目は高校生活の紹介、二年目は地域文化とコロナ・防災の紹介をしました。皆さんが作った紹介動画のおかげで私たちは日本の祭りや飲食文化や丹波市のことをより理解することができました。12 月のグローカルサミットにもお招きいただいてとても感謝しています。あのような国際交流は初めてでした。私にも生徒達にもなによりも珍しい学習経験だと思います。早く初対面の日が来ますように…。

三年愛組　車の友達

このたび、二回のビデオストリーミングを通して、私は多くのことを学んだと思います。おそらく初対面や言語の違いなので、途中で少し気まずくなることがありましたが、最後まで頑張って日本語で楽しく喋りました。今度は初めて日本の方と話しましたので、とても楽しくて忘れられない思い出になりました。

三年愛組　キリン

今回と前回の交流はとても楽しかったです。僕は初めて同齢の日本の方と喋って、途中で話題がなくなり、何も話さない時もありましたが、日本の学生は色々な話題を考えてくれたし、会話もすらすらと出てきました。しかし、時間が足りないのは残念ですね～また、言葉がわからない時には「すみません、もう一回お願いします」と言ったら、ゆっくり説明してもらい、みんなめっちゃ優しいと思います！！本当に楽しかった！

三年愛組　フルファ

日本の方と交流するのは今回が初めてです。とても緊張していました。自己紹介を通して、お互いの個性と興味を知りました。また、防災の知識を分かち合った時、日本の防災活動はどうやって行われるのか、未来の計画は何なのかも知りました。コミュニケーションの時間が長くないんですが、紙で道具として使ったり、たくさんの話が出てきたりして、日本の学生さんが優しくて、親切だと私は思います。

探究Ⅱ

２年生「探究Ⅱ」(２単位)の授業では、昨年度のプログラムを基にして次のように展開した。

１　生徒個人が興味のある・取り組んでみたいことを確認するための面談
２　グループ分け
３　テーマ設定
４　探究活動（先行研究分析(論文精読)、基礎研究(フィールドワーク)）
５　中間発表会での発表(パワーポイントを用いた口頭発表)
６　各種発表会への参加
７　論文作成
８　本校発表会「地域課題から世界を考える日」での発表

今年度もグループで１つのテーマを設定して探究を進めていくことにした。テーマを設定させ、テーマに沿った論文の精読やフィールドワークを行い、成果をまとめ、発表していくようにプログラムを編成している。

今年度の発表会の形式は外部発表も含めて昨年に引き続いてオンラインが多くなることが予想されたことから、ポスター形式から画面共有をしての発表にも使いやすいパワーポイントを用いた口頭発表に切り替えた。

やはり、時間を要したのがグループ分けとテーマ設定のところである。まず、グループ分けにおいては全８グループとした。今年度扱うテーマを再設定させ、似たような題材を希望する生徒をグルーピングしていくことを目的として、担当教員８名で一人一人聞き取り調査を行った。扱いたいテーマが不明瞭であると判断された場合、この聞き取りが複数回行われることもあった。聞き取り調査を踏まえ、類似する題材をグルーピングし、10グループを作っていった。グループに分けられたそれぞれの生徒らには、グループ毎に自らの興味ある内容を班員に伝え、そのグループで取り扱うテーマを何にするか、議論を重ねさせた。

テーマ設定にいては特に時間を要した。指導教員が時間をかけて面談を重ね、生徒らの希望を聞きながら、研究の方向性を定めていった。

フィールドワークについても、オンラインでの実施によって遠方の人とでも容易につながることが可能となり、複数回の接触が可能という利点もうまく使えるようになった。各グループがフィールドワークにおいて工夫を凝らしながら進めてきた探究活動をまとめた論文のタイトルは次のとおりである。

１	効果的な復習方法の考案 ～数学Ａユーグリットの互除法を用いて～
２	意欲的に参加するための授業形態の提案 ～洋楽を使って目指せリスニング力 UP！～

3	カンボジアの算数教育から学ぶ ～楽しく意欲の湧く学びづくり～
4	長崎さるく的まちあるきの実践 ～学校での共通体験を通した在丹外国人との信頼関係の構築のために～
5	数学における協働学習が生徒の学習に及ぼす影響について ～数学Ａ及び数学Ⅱの授業を事例にして～
6	HSP と上手に付き合う方法 ～自分の長所に変えていくには～
7	十人十色 ～丹波市に同性パートナーシップ制度を導入するために～
8	文化を残す必要性について考え方言を後世に残すことを目的とした探究活動
9	川裾祭とホトケドジョウとフェスが大好きな高校生たちが提案する祭のカタチ -地域伝統と生物多様性と多世代交流に焦点を当てて-
10	丹波市における犬、猫の殺処分の現状とその改善策の研究

今年度は、探究Ⅱの班からは次の外部発表会に参加した。

リサーチフェスタ 2021　(甲南大学)
田舎力甲子園（福知山公立大学）
Glocal High School Meetings 2022 全国高等学校グローカル探究オンライン発表会
全国高校生マイプロジェクトアワード 2021　関西 Summit
HYOGO×WKC フォーラム 高校生 SDGs 探究発表会 2021
探究甲子園(関西学院大学)

外部での発表会がオンライン開催となり、当日の発表に加えて今年度は、事前や事後に動画の提出も求められるようになった。一つの発表会の準備などに要する時間も多くなっていった。

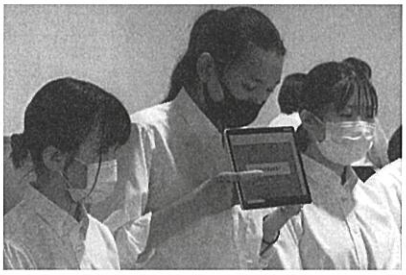
一つ一つの場についても参加範囲・数が一気に広がり，全国から，そして多く集まることとなった。これらに参加していくことは生徒らにとっても刺激あるものとなり、生徒らも回数を重ねるたびに要領よく話せるようになっていったが、統括する部（研究推進部）には多くの案内が届いた。これらの案内について、内容・対象・実施日・条件等を見ながらどれを生徒らに下ろすかについては部内で慎重に協議をした。

・どの発表会にエントリーしていくか

・どのグループをエントリーさせるか

また、エントリーや発表に向けての指導は授業内に留まらないことも多くなってきた。参加させる班の発表内容をどの程度を目指して指導するのか、いつ指導するのかについても生徒の負担過多にならないような配慮が必要であろう。実際、生徒の授業アンケートの自由

記述欄に、「放課後残って仕上げないといけない」「部活に行けない」「家でも作業を進めていかなくてはならず、勉強時間が削られる」などの意見も散見された。一方で、「進めれば進めていくほど何も知らないということがわかった」「普段の生活においても多角的に見ることができるようになった」というものもある。指導のタイミングやバランスを指導側が調整することが必要である。



ここからは、一連の探究活動を経験した生徒の指導に当たった職員の声を紹介する。なお、発表に使用した資料および論文の一例は後に生徒作品の頁にて示すこととする。

○指導教員の声

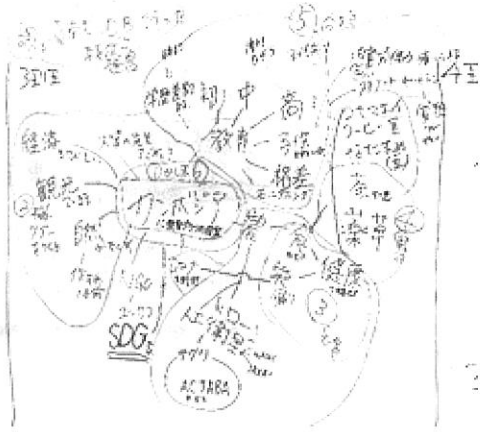
探究活動の指導を終えて　　２学年主任　土井 敬子

探究活動ではマイテーマを決めるのに非常に時間がかかります。研究のテーマは「自分の興味・関心があること」と「社会・学術の課題」が重なる部分を選ぶのが基本なので、担当教員が生徒と何度も面談を繰り返し、テーマを絞っていきました。主体的に取り組むためにテーマ決定は非常に重要です。協働学習も探究の目的の一つであるので、テーマをグループに分け、グループ内で再びテーマを絞るために焦点化していきました。テーマに関するマインドマップを作ることにより、テーマを深堀りできました。テーマが決まれば先行論文の精読をし、各班で深堀りしたマイテーマを言語化し、発表していきました。テーマが決まれば、課題研究で何を明らかにしたいのかを示す問いであるリサーチクエスチョンを考え、その答えである仮説を立てていきます。調査や実験・アンケートなどにより、リサーチクエスチョンの答え出す前に研究計画書を班で話し合い、研究手法なども決定していきました。アンケート、インタビュー、フィールドワーク、官公庁への聞き取り、実験などコロナ禍で制限のある中での限られた活動ではありましたが、工夫をして調査を行っていたようです。繰り返し「問い」を設定し、その都度、挫折と試行錯誤を繰り返し、何度も何度も班で話し合い、議論を戦わせることにより、研究を深めていました。最終成果物は論文の形にまとめました。この探究的な学びを繰り返すことにより、情報の収集と分析力を身に付けるだけでなく、自ら考え行動する力、まとめて表現する力、協働する姿勢を身に付けることができたと思われます。また研究が社会や学術の発展や今後の自身進路実現の礎になることを願っています。

探究Ⅱを担当して　　知の探究コース　２年１組担任　芦田 悠

探究Ⅱの授業を振り返ってみると、この授業で生徒が身に着けたのは「自立して学ぶ力」であったと感じます。

今年度の探究は、テーマ設定に非常に苦労をしました。それは多くの生徒が１年次の探究Ⅰでの経験を生かしつつも、昨年度と違ったテーマに取り組む方向で考えていたからです。



１学期当初は、個人で興味のある事柄をマインドマップ等に表し、頭の中を整理することから始めました。その後、興味のある分野が近い生徒どうしで比較的大きなグループを形成しました。グループ内での発表や、他のグループに向けての発表を行いました。発表をすることで、自らの興味について再認識できたようでした。そのうちに、興味を同じくする更に小さなグループに分かれていき、探究が本格的にスタートしました。

各グループが探究を行う時、対峙しなければならなかった壁が２つありました。１つ目は、研究手法の選択です。多くのグループが、クラスの内外の生徒に対してアンケートを行いました。あるグループは、アンケートを行ったものの、その結果を自分たちが立てた仮説をサポートするものとして生かすということの困難さに直面しました。特に、効果的な学習方法について研究したグループは最初のうちは、アンケートの形式をどのように工夫すれば良いのかを時間をかけて考えていました。２つ目の壁は、コロナの影響で直接インタビューやフィールドワークの実施が困難な時期が長かったことです。そんな中でも、研究の方向性を模索するなかで新しい視点を持って研究を継続するグループが多くありました。例えば、「英語教育」のグループでは、初めのうちはインタビューや授業の見学に力を入れ、海外の高校生に英語教育に関してインタビューを行うという構想を描いていました。それが難しい状況になったとき、効果的な学習メソッドに焦点を当て直しました。実際に自分たちが作った教材で１５分程度の授業を行いました。その後も教授法や英語の習得法に関する研究を続けています。

探究も大詰めに近づくにつれて、教員が中に入る機会が激減しました。探究のグループ内で自立して学べる状況が生まれました。研究手法やテーマ設定では改善点もありますが、この授業で身に着けた学び方は、進学した後や社会に出た後でも生かされるはずです。

最後になりましたが、フィールドワークやインタビューで探究の授業にご協力いただいた皆様ありがとうございました。

総合Ⅲと指定３年間の活動を通して　　藤原　一彦

Ⅰ　総合Ⅲ

第３学年総合的な探究の時間は「総合Ⅲ」という名称で、表現能力を高めることを主な目的として実施した。情報を取り入れ取捨選択し、それらに各自の考えを加えて新たな意見を創り出し、より適切な言葉で表現し他者に伝えるということを、生徒の意欲がより高く保てるように、面接試験体験など進路実現に直結するようなプログラムも取り入れながら行った。

「話す・書く」という表現能力の向上を目指した。いずれのプログラムについても「話す・書く」前に、ある程度の時間を取って準備をした上で「話す・書く」に移ったため、より質の高い表現ができたように思われる。特に面接試験体験では、大学・企業側の役割を務め質問項目を考えたことによって、受験生としてより的確で深い回答ができるようになった。小論文講座では、興味がある内容・将来の進路に関係が深い内容の講座を選択させたことによって、講座内での討論や協働学習が活発化し、論文執筆にもよい影響があった。発表・論文という「話す・書く」作品の質の向上もみられたが、それらの作品ができあがるまでの過程において、「話す・書く」力が充分に発揮されたように思われる。

（１）学習内容

① 他己紹介（４月）

ペアを組んだ生徒の情報を取材し紹介文を作成し、グループ内で紹介する。可能であれば紹介する生徒の進路希望も取材し紹介することによって、進路実現に対する意欲の向上も図る。

② 面接試験体験（５～７月）

大学入試における面接試験と企業入社試験における面接試験を、面接官役と受験生役に分かれて体験する。事前に示された大学・企業の求める学生像に対して、予想される質問と回答例を考えておき、模擬面接試験を実施する。

③ 小論文講座（９～12月）

教育・保育、医療・看護、人文科学、社会科学、自然科学、生活科学の６分野の講座から希望する講座を選択、それぞれの講座で提示されたテーマについて小論文を作成した。各講座内でテーマについて討論を実施したり、関連資料を精読したりするなどして、テーマについての理解・考えを深めた上で論文を執筆した。

（2）生徒感想

強く印象に残っている内容は他己紹介と面接練習です。私にとって苦手な分野でしたが新しいことに気づかされました。多くのクラスメートが大人に負けないくらいの発表をしているのを見て勉強になりました。

面接練習では、自分の性格が少し変化した気がします。自分の性格を相手に説明することに苦を感じなくなり、日常生活でも自信をもって発言できるようになりました。

私はこの授業を通して、自分が変化したことがうれしいです。クラスの子の姿を見て成長することができたと感じたのは私だけではないはずです。　3-2 岸田真依

総合Ⅲの授業で行った他己紹介では、自己紹介とは違い相手のことを上手く紹介することが難しかったです。しかし、他己紹介を通して今まで知らなかったことも多く知ることでその人の良さを再確認することが出来ました。

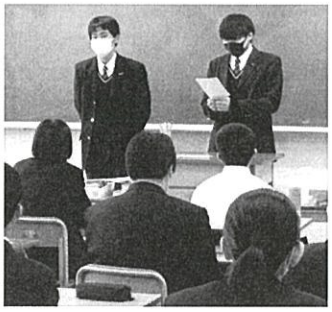
面接や小論文の授業は、受験に役立つことが多くありました。特に小論文では興味のある分野に分かれて授業を受けたので、他のクラスの友達からも刺激を受けることができ、1人で学ぶよりもクラスや学年で学んだことによって色々な考え方や意見を取り入れることが出来たので良かったです。

大学では、新しい仲間との交流を通して考える力をより磨いていきたいです。また、総合Ⅲで身につけたコミュニケーションのとり方を活かしてボランティア活動に積極的に参加し、将来の夢に向かって頑張っていきたいと思います。　3-3 畑　帆花

様々なことを学習してきましたが、その中でも面接練習では細かい作法から学ぶことになりました。自分が意識するだけではぎこちなく、なかなか身につかなかったけれど、グループでアドバイスをしたり、ここがよかったと褒めたりしているうちに自然と身についていきました。実際の入試にも活かすことができました。社会に出ても大切なことを高校生のうちに授業として学べたのは良かったです。

分野ごとに分かれた小論文では、実際に職業に就いた時に自分はどう考え、どう行動するのかを想像しながら進めることの大切さを学びました。他のメンバーにも相談しやすく、自分が選んだ分野についてもっと深く学びたいという気持ちが大きくなりました。

総合学習がペアやグループ活動が多かったので、自分の意見も言いやすかったし、いろんな意見を聞いてより学びが深まりました。　3-6 久保菜摘



2　3年間の総合的な探究の時間を終えて

（1）身につけさせたい力

① 聴く力　② 読む力　③ 伝える力　④ 考える力　⑤ 発表する力

（2）学習の経過

第1学年　①柏原高校の歴史（創立100周年時に作成された百年史をまとめた）

②丹波の人物伝（身近な大人を取材し紹介した）

③生き方プレゼン（自分の過去・現在・未来をまとめ発表した）

取り組みのねらい

上記「③生き方プレゼン」において、高校生活での目標・取り組み方、さらに生き方まで考えさせ自分を見つめることが最大の目標であった。今所属している本校の歴史を知り、地域で活躍されている大人から学び、それらを含めて自分を見つめなおすというプログラムを設定できた。

第2学年　①台湾とは何か（「台湾とは何か」：野嶋剛著　を精読しまとめた）

②台湾高校生との交流（台南第一高校・桃園治平高校とオンラインで交流した）

③志望理由書（高校卒業後の目標を小論文指導もかねて作成した）

取り組みのねらい

修学旅行で訪れる予定であった台湾を題材に、国とは何か・国際交流とは何かを考えさせた。②台湾高校生との交流では、日本や自分たちの生活を紹介する動画を作成することによって、日本や自分自身についての理解も深めさせた。③志望理由書では、文章作成によって、身につけさせたい力の向上を目指すとともに、進路実現に向けた意欲の高まりも目指した。

第3学年　　「総合Ⅲ」参照。

（3）まとめ

3年間を通して、討論→整理・創造→発表という流れを多く取り入れて活動してきた。（1）で示した身につけさせたい力のうち、特に⑤発表する力は目に見えて向上した。しかし、それ以上に発表に至る過程に変化がみられたことが大きな成果であったと考えている。

第1学年時にはグループで何かを作成する場合でも、単に各自に割り当てられた部分をつないだだけであったり、一人のリーダーの指示だけで物事が進んでいったりすることが多かったが、第3学年時には、お互いの意見を尊重しながらまとめていくような行動がとれていたように思われる。まさに協働ができたということであり、5つの身につけさせたい力が向上したと言ってもいいだろう。

生徒感想

台湾学習では台湾の生徒と交流をしたり、本を読んだり講演を聞いたりしました。交流した台湾の生徒の日本語の流暢さには驚き、感心しました。日本文化について知りたい、そして台湾の文化も伝えたいという気持ちが伝わり、国が違っていても繋がることが出来ると分かりました。台湾の選挙投票率が高いことから日本の投票率の低さの原因や改善策を考えることもありました。台湾学習を通じ、日本について改めて学ぶことが出来ました。

面接練習では欲しい人材を見極めるためにはどのような質問をすればよいのかを面接官側の立場になり考えられました。普通の授業では経験出来ないことで新鮮だったし、勉強になりました。実際の入試の面接にも学んだ事を生かせました。

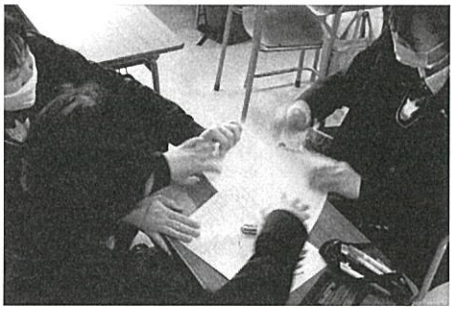
全ての活動においてグループで話し合う機会が多く設けられていて、自分では思いつかない考えも聞けたので良かったです。　3-4 足達優衣

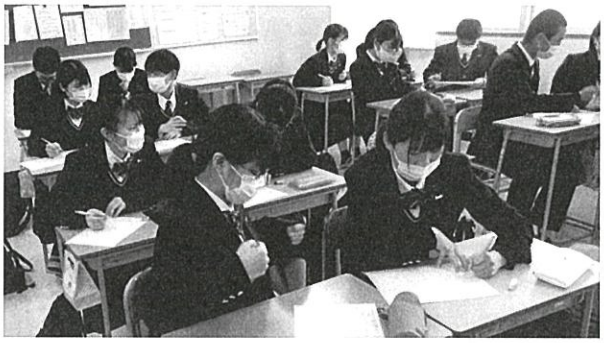
私は3年間総合の授業を受けてきた中で特に2つの事が思い出に残っています。

1つ目は丹波地域の偉人を調べ発表した事です。自分が住んでいる地域の人達がこれまでどんなことをしてこの地域を盛り上げできたのかを知ることが出来ました。その事を学び、これから私たちがどう地域を盛り上げたら良いのかヒントを貰えた気がします。

2つ目は他己紹介を行ったことです。他己紹介をするにあたって友達の良いところをたくさん見つけることができました。また、私のことを友達が紹介してくれた時、普段自分では気づいていない良いところを紹介してもらい、自己肯定感が上がりました。そして、「私の性格を客観的に見て将来の夢に合っている」と言ってもらえたことで自信を持て、さらに夢に向けて努力しようという気持ちが強くなりました。

総合を学ぶことで普段の授業では学べない地域のことや自分自身、友達について深く知れ、これからの将来についても考えられるいい機会でした。　3-5 大槻真白





グローカル

澤　杏咲

グローカルで１番初めにした活動はスピーチでした。テーマは「自分が passion を持っているもの」でした。好きな映画の紹介や将来の夢など、それぞれが熱意を持っているものやことについてスピーチするという内容でした。スピーチをする時は、事前に用意した英文を丸暗記するのでは意味がなく、文の中のキーワードだけを覚えてそこから頭の中で英文を作った方が英語でプレゼンする力がつくという ALT の先生のアドバイスもあり、まずは自分が伝えたいトピックごとのキーワードを決めることから始めました。そこからスピーチ練習の時間では何度も何度も英文を読み上げるのですが、ここでは抑揚の付け具合が特に難しかったです。日本人は普段の会話ではイントネーションやアクセントが常に一定なので、そこに抑揚や強調などを加えて外国人のように発言することはとても難しかったです。

本番では、発表をした後に先生一人一人から感想やアドバイスを下さるので、反省点が何かがとてもよくわかりました。74 回生のグローカル選択者は全員外国語大学へ進学するので、スピーチやプレゼンなど自分の言葉で伝える機会をたくさん経験し、世界に通じる英語力を身につけたいと思います。グローカルはその土台となるとてもいい学習になりました。

鞍留千愛希

グローカルの授業の締めくくりはプレゼンテーションでした。プレゼンテーションでは、各自１つずつテーマを決め発表を行いました。各自テーマを決める時には、興味のある事などを沢山書き出しその中から自分が発表したいと思う内容を１つ選びました。そのテーマについて各自で調べ出しました。発表する上で知っておかないといけない事やちょっとした豆知識など、調べる上で自分も知らなかったことが沢山あり新たな発見にもなりました。例えば、お壽司や和菓子などの日本の伝統的な食べ物からスターバックスの歴史、さらにはイルミネーションなど様々なジャンルについて調べました。次に調べたことを英語で説明する文を考えました。分かりやすく、伝わりやすい英語になるように発音や文の組み立て方までグローカルの先生方に教えてもらいました。次にプレゼンテーションには欠かせないパワーポイントの作成をしました。見やすいように写真を貼り付け、説明をより分かりやすくするための文章など工夫をしました。実際プレゼンテーションをする時にはスピーチとは違い相手に伝えることを意識して発表をしました。これらのことを通して私はさらに英語だけではなく、説明し相手に伝える力もつけることができたと思います。それだけではなく内容をふまえた質問に対応する力もつけることができました。

英語　学校紹介動画

英語　ニュース番組

尾松　宥門

今年度のグローカルでは自分たちは昨年の探究の授業で協力して書いた論文の英訳とその内容をさらに深める作業を主にしました。この授業を通して自分の英語力は確実に向上したと思います。学校の英語の授業では普段英語を書くなどの練習はあまりしない中、中期的に英訳の練習をすることはとてもためになりました。

また ALT のバルナさんやテイラーさんのおかげで、日本で生活していては知り得ないような海外の文化や習慣についても知ることができました。言語を学ぶだけでなく文化を学ぶことも大切だと思うし、個人的にそういったことに興味があるので些細なことでも教えてもらえて嬉しかったです。ハロウィンやクリスマスにはバルナさんが作って下さったクッキーやケーキなどを食べたのも楽しい思い出です。

濵田 実李

私は3年間、地域活性化について取り組んできました。1年生の時は、身近にある無人駅を利用し地域活性化を考え、2年生はグループ研究で丹波市に移住者を増やす提案をしました。今年は探究してきたことを踏まえて自分が地域になにが出来るかを研究しました。地域活性化について勉強していると、地域の知らないことや新しい発見が沢山あり、いろんな場所や物に興味を持つことが出来ました。度々研究に行き詰まってしまい、次のステップに進めない時は先生や友達が的確なアドバイスをくれ一緒に考えて下さいました。また、地域の方や研究に協力して下さった方のおかげで研究をより深くすることが出来ました。今年の12月にグローカルサミットがあり、司会をしました。韓国や台湾、日本の学校と zoom で話す機会が沢山あり、海外や他の地域の人と交流し楽しい時間を過ごせました。英語で司会をするのは難しく、慣れませんでしたが、友達と協力してとても貴重な経験をすることが出来たと思います。

嶋田衣里

私は3年間を通して「教育」について探究しました。1学年の時、担当してくださった先生と探究テーマを考えるのに1学期程かかりました。しかし3年生でグローカルを受けたいと思えたのはこのテーマがあったからだと思います。1,2学年の探究授業は生徒約4人に先生1人がついてくださる素晴らしい機会で、私のテーマ決めのときのように親身になってくださいました。3年生で取ったグローカルでは生徒4人に担任の先生と ALT の先生2人がついてくださり、とても充実した授業を受けることができました。全員の距離が近く話しやすい環境で、疑問に思うことを質問すれば先生視点と海外視点から答えてもらえます。そのおかげで論文の内容に幅ができてよかったです。3年間学んだことを後輩に伝える場もあり、これから柏原高校でもっと探究活動が盛んになる手伝いができて嬉しかったです。

（グローカル英語紹介動画：字幕付）